



(上)横浜海上防災基地に集結した隊員たち。延べ4日間の訓練に臨んだ(撮影:久野真一)
(右)初日には、訓練に先立ってIECに関する講義が行われた
(左)がれきに見立てたコンクリートを持ち上げて、救助できる空間を作り出す技術も学んだ

チームの国際的な能力評価基準となるIEC(国際搜索救助諮問グループ外部評価分類)の受検対策として行われた(囲み記事参照)。JDRでは2010年3月に受検を予定している。

これまで、JICA、外務省、警察庁、総務省消防庁、海上保安庁、医療班からなる「IEC受検準備委員会」を設置するなど、最も高い能力基準となる「重(Heavy)」の認定に向け一丸となつて準備を進めているJDR。「すでに基準の大半は十分にクリアしている」と貝原孝雄・JDR事務局長が話すように、JDRは国際的にもトップレベルの技術を持つが、唯一、「重」レベ

ルの認定に必要なショアリングは、国内の救助活動で正式に導入されておらず、新たにノウハウを習得する必要があった。

日本の代表として被災者の力に

「しっかりと声を掛け合つて!」「くぎを打つ場所は正確に!」訓練を指導する在日米海軍統合消防局佐世保署の草場秀幸さんが、真剣なまなざしで隊員たちにアドバイスを送る。01年のアメリカ同時多発テロで、ショアリングを使った救助活動をテレビで目にして衝撃を受けたという草場さん。以降、アメリカから現役の救助隊員を招いてト

材を、垂直や斜めに組んで支柱を作り、訓練用に設置されたプレハブ小屋の天井や外壁を支えていく。これは、地震などの災害で倒壊した、または倒壊寸前の建物の二次崩壊を未然に防ぎ、取り残された被災者の救助活動を安全に行うための「ショアリング」という技術だ。

被災地で起こり得るさまざまな事態を想定し、JDRでは技術やチームワークを向上させるための研修・訓練を日ごろから行っている。今回の訓練は、救助

レーニングを行うなど、国内での草分け的存在として、一部の消防隊を対象にショアリング技術の普及に努めてきた。

「切った木を組んでいるのを見て、『本当にこれが救助なのか?』と初めは驚きました。ショアリングは救助活動の安全性を格段に高めることができる。すぐに日本でも導入したいと感じました」

ショアリングは、建物の倒壊パターンに合わせたさまざまな手法や方法論が、すでにアメリカを中心に確立されている。その技術を学べば、二次崩壊の危険性から以前はあきらめざるを得なかった現場でも、今後は救助活動が行える可能性がある。

JDRのみならず、国内の救助活動全体にもたらす影響も大きい。

正確で緻密な作業が要求される中、水平器、メジャーを使ってパーツの傾き具合や長さを調べながら、見事な連携プレーで支柱を設置していく隊員たち。技術を習得しようとする一人一人の集中力と意気込みが伝わってくる。

「日の丸を背負う重さをひしひしと感じる」というのは、08年からJDRの訓練に参加してい

IECとは

IEC(INSARAG External Classification)とは、都市型搜索救助活動の調整を行う国連傘下の搜索救助チームの国際的ネットワーク・INSARAG(国際搜索救助諮問グループ)が、各国の救助チームの実力を測るため、2005年に定めた外部評価分類のこと。搜索、救助、医療、ロジスティクスなどの観点から、救助チームの行動と能力を評価する。「重(Heavy)」「中(Medium)」「軽(Light)」の3段階に分類され、「重」チームには、24時間の活動を10日間継続できる能力や、搜索犬、搜索機材を使った活動、ショアリング技術などが求められる。これまでに11カ国のチームが「重」、2カ国のチームが「中」として認定されている。基準を設けることで、能力が異なるチームの無秩序な活動による混乱を避けるとともに、チーム間の活動調整を円滑にし、被災状況に応じて効果的・効率的な救助が行えるようになる。



ショアリングでは、木材を切断してパーツを作り(左)、組み合わせる角度や打ち込むくぎの位置などに注意しながら支柱を設置していく(撮影:久野真一)

がれきの下の命に届く 新たな技術を

被災現場の状況に合わせ、より効果的・効率的な救助活動が行えるよう、国際緊急援助隊(JDR)の登録者は、研修などを通じて日ごろからスキルアップに努めている。2009年5月、まだ日本に導入されていない新技術を学ぶ救助チームの訓練現場を取材した。



垂直方向のショアリングを指導する草場さん(右)。「いかに一人でも多くの被災者を救い出すか、ということに忘れずに技術を磨けば、本番でも必ず良い結果が出るはず」とエールを送る(撮影:久野真一)